

プロローグ

ここにフィリピンから送られてきた手記がある。

私はナオミ、19歳です。ダバオに住んでいます。

私は、母アンと父ノブの長女です。母はフィリピン人で父は日本人ですが、二人は法律上は結婚していません。

お父さんは何度かフィリピンに来たことがあります。私は1995年2月にフィリピンで生まれました。母の話では私が小さいとき、お父さんは私たちの生活を支えてくれたそうです。おかげで私たちの家族は不自由のない生活を送っていました。

お父さんはとても愛情深い人で、私たちに自分の気持ちを伝えるためにフィリピンに来ました。そして、フィリピンで私の出生登録をする時に自分の娘として認めてくれました。1歳年下の弟ユウジの誕生日を祝うときにも、お父さんはフィリピンに来てくれました。(中略)

私が6歳で小学1年生のころ、お父さんは連絡がとりやすいように私に携帯電話を買ってくれました。そのころ、お父さんは月に2、3回は私たちに電話をかけてきてくれました。あるとき、お父さんが私に電話をくれ、「元気か?」とたずねました。私は今でもそれを思い出します。お父さんの声は今でも忘れません。それが最後に聞いた声になるとは、思いもしませんでした。そして、お父さんと連絡をとりあったのも、それが最後でした。(中略)

お父さんがいなくなり、母だけで私は育ちました。私の人生は困難に満ちていました。経済的に貧しくなり、学校に通うことや、日常生活を送ることもむずかしくなりました。生きていくために母は一生懸命に働きました。食費や学費、生活費のために、母はパイやサラダなどをつくって売りました。自分たちの家を持っていなかったため、祖父母の家に身を寄せ、母のきょうだいやいとこと暮らしていました。私たちは助け合って暮らしました。年上のいとは、母の商売を手伝いました。

時が経つにつれて、私は「お父さんに会うことができるのだろうか」と自分に問うようになりました。お父さんを見つけることができないか、と母にたずねました。すると母は「お父さんは日本にいるよ」とだけ答えました。昔のようにお父さんから小包が来ていないかと聞いたこともありましたが、母は「小包は送られてくるけど、お父さんからではないよ」とだけ答えました。母はたくさんの問題に直面していたのです。

母は家族のなかで父親と母親、二つの役割を果たしました。私たちが成長するにつれて支出は増え、そのためによりたくさんのお金を稼がねばならなくなりました。私は母のたとえようもない深い愛情と苦勞を見てきていますし、感謝しています。母のおかげで私たちは、小学校を卒業することができました。卒業証書をもったとき、私は幸せでした。でも、心の底に空虚感がありました。

お父さんに会いたかった。一緒にいてほしかったのです。(中略)

高校時代、私は毎週土曜、日曜と夏の間、親戚の果物屋の屋台で果物を売りました。働いたかわりにわずかな給料と果物をもらい、それで満足しました。日本で働いて仕送りしてくれるおばと母の努力によって、私は高校を卒業し、卒業証書を受け取りました。私は幸せでしたが、心の奥深くには穴があいていました。卒業式の日、私は父親と一緒にクラスメイトが妬(ねた)ましくてしかたなかったのです。(中略)

2013年、私はお父さん探しを手伝ってくれる支援団体RGS?COW(*)に登録しました。お父さん

の行方がわかれば、もう一度お父さんの愛情を感じたい、という私の夢が叶うかもしれません。お父さんは古い写真のなかでしか見ることはできませんが、それでも私は長い間、お父さんに恋焦がれてきました。

19年間の人生のなかで、私は彼のしたことを少しも恨みに思う気持ちを持ったことはありません。父ノブが私たちを残していったのは、何か理由があったのだと思います。なぜなら、祖母は、私たちの父親はよい人で母のことをとても愛していたとっているからです。長女である私は、崩壊した家族、貧しさからくる悲しさを消すために、何度も泣いてきました。

でも、私はもう19歳。強くなりました。もう一度お父さんに会うことを願っています。

*正式名 Religious of the Good Shepherd-Center for Overseas workers (善き牧者たちの宣教者会 海外出稼ぎ労働者のためのセンター) 海外出稼ぎ労働者の帰国サポートや人身売買防止活動とともに日本人の父親に養育放棄されたJFCの支援をしている。

日本人とフィリピン人の間に生まれた子ども、ジャパニーズ・フィリピン・チルドレン (略称JFC) が、フィリピンと日本の両国で暮らしている。その多くは、母親がフィリピン人で父親が日本人だ。JFCの出生が急増したのは、バブル全盛期。日本に出稼ぎにくるフィリピン人女性や、商用や観光でフィリピンを訪ねる日本人男性が増え、あちこちで日比間の男女が出会うようになったことが背景にある。両親の愛情に包まれて育つJFCがいる一方、ナオミさんのように突然、日本人の父親が連絡を絶ち、養育放棄された子どもが続出し、1990年代に入ると社会問題化した。現在、その数は10万人とも20万人ともいわれている。

私が初めてJFCのことを知ったのは、子どものときだった。たまたまつけていたテレビの報道番組でJFCが取り上げられていたのだ。日本とまったく景色の異なるフィリピンで暮らす、日本人のような容顔を持つ子どもたちに目を奪われた。取材班は、フィリピンにいる母子から父親の住所を聞き、日本に帰ってその場所を訪ね歩いたが、ほとんどが架空の住所だった。唯一見つかった日本人男性は、子どもの父親としての責任を問われると、こう叫んだ。

「そんなのは、相手のミスイクじゃないか」

その男性は、子どもを妊娠したのは女性の落ち度だといったのだからだろうか。子どもは自分の存在が間違いだといわれたら、どうやって生きていけばいいのか。そのころは、ちょうど私も思春期の入口にいて、親の望むような子どもにはなれないことを自覚し、自己肯定感を持てなかったためかもしれない。モザイクのかかった男性の叫び声に動揺したことをよくおぼえている。

それから20年後、偶然の出会いとチャンスに押され、JFCの取材をはじめた。すでに母親世代になった私は初め、日本人男性から捨てられた母親たちの話を聞いて、悲しんだり怒ったりした。取材中のメモには、男性たちを糾弾するような言葉も書いてある。しかし、JFCの青年たちに会い、彼らの言葉で父親への思いを聞くにつれて、私の視点は少しずつ変化していった。

冒頭の手記を書いたナオミさんは、大学進学を希望していたが、経済的な事情から断念し、かわりに弟を大学へ行かせるため、ミネラルウォーターを配達する仕事をしている。短い髪に、がっしりとした体格のナオミさんは、思春期にさしかかったころから男友達とばかりつるんだ。ときには、やんちゃをすることもあった。男らしくふるまうようになったことについて、ナオミさんは、「父親のいない家族のなかで、母を守らなければならなかったため」だと考えている。

彼女の手記を読んだあと、支援団体RGS?COWのオフィスで彼女に会った私は、「もし、お父さん

に再会したら何といたい？」とたずねた。

「ありがとう」

「どうして？」

と驚いて聞き返す私に彼女は重ねていった。

「だってお父さんがいなければ、私はここにいなかったのですから」

ナオミさんの父親はまだ行方がわからないままだ。けれども、彼女の言葉を聞いたら父親はどう思うだろうか。理由もわからず自分のもとを去っていった父親を許し、感謝の気持ちまで口にする彼女の度量の深さに、私は心を動かされた。

こうしたJFCの言葉、生き方は、先進国の住人というだけで驕(おご)りを持ってきた私たち日本人に、重要な示唆を与えてくれるのではないか。そう考えるようになった。

この本の後半では、日本のなかで生きるJFCの姿を伝えたい。現在日本に暮らす外国人は200万人を超え、JFCのほかにも多様なルーツを持つ子どもたちが日本で生活している。こうした子どもや母親の視点に立つと、さまざまな日本の課題が浮かび上がってくる。JFCたちは「お父さんに僕たちのことを伝えてほしい」「フィリピン人は世間が思っているような悪い人たちじゃないと気づいてほしい」と取材に応じてくれた。だが未成年者も多く、デリケートな内容もふくむため、登場人物の一部は仮名とさせていただいた。そのうえで、日本とフィリピン二つの国を生きる子どもたちが発する声を共有していただければ幸いである。

なお、日本人と外国人の親から生まれた子の呼称としては現在も「ハーフ」が定着しているが、二つの文化を併せ持っている子としての敬意をこめて、この本のなかでは「ダブル」と呼びたい。ただ、当事者の会話のなかで出てきたときには、そのまま「ハーフ」を使用した。

2015年9月

野口 和恵